

# 新入生の不適應に、 どう向き合う？



生徒との対話のなかで、ちょっとしたひと言や言葉のかけ方によって、生徒の反応が大きく変わってきます。わかってはいても、実際に実行するとすると意外に難しいことも…。そこで、進路指導のケースとしてありがちなやりとり例をいくつか挙げ、それぞれのチェックポイントを教育カウンセリングの専門家・会津大学の苧間澤勇人先生に解説していただきました。生徒との対話力向上に、役立ててください。

取材・文／清水由佳 イラスト／おおさわゆう



## 【解説&アドバイス】

会津大学 文化研究センター  
上級准教授  
苧間澤勇人先生

かりまざわ・はやと ●1986年岩手大学工学部卒業後、岩手県立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

## 今回のケース

### 学校・クラスにまだ馴染めていない1年生男子

#### <ケースの背景・状況>

入学して1カ月が経ち、そろそろクラスの中でも「仲間」「友人」関係ができ始めた頃。どのグループにも属しておらず、一人であることが多い生徒。部活にも入っていないようで、登下校も一人。勉強にも熱心に取り組んでいる様子は見られず、授業中は寝ていることが多く、生活面では遅刻が増える。ついに欠席をしたので、個別で話を聞くことにした。

#### ありがちなやりとり

①

#### 欠席や遅刻などの 原因追及パターン

先生：今日も遅刻したよね、このところいつも遅刻しているよね。  
生徒：え、たまたま今日は少し遅れただけです。  
先生：何で遅れたんだ。理由は？  
生徒：・・・別に。  
先生：理由がないわけないだろ。寝坊か？  
生徒：道が混んでいて、しょっちゅうバスが遅れるんです。  
先生：いつも遅れるなら、1本早いバスに乗るようにすればいいだろ？  
生徒：え～、でも・・・。  
先生：でも、じゃないだろ。わかったな。

#### 【解説&アドバイス】「教える—教えられる」という上下関係からの脱却を

生徒との日常の会話で、ありがちなやりとりではないでしょうか。遅刻や欠席を、「なぜしたのか？」と問いただすパターンです。けれども、お互いの人間関係ができていない状況や上下関係があるなかで「なぜ？」「どうして？」と尋ねられると、された側は「責められている」と感じてしまいます。この場合も、まさにそのパターン。先生と生徒の関係が、従来の「教える—教えられる」という上下関係を引きずったままで、一方的な会話になっています。し

かも、遅刻の原因を「寝坊か？」と勝手に決めつけ、「1本早いバスに乗ればいい」と押し付けてしまいました。これでは、生徒は素直に自分の話をすることができません。

まずは、先生自身が、生徒とは同じ立場であることを意識する必要があります。どうしたら良い方向にしていけるかを、お互いに考える共同体であること。そのための合意形成をいかに図るかが大切です。

ありがちなやりとり

②

### 馴染めていない様子を 指摘&他の生徒に 頼むパターン

先生：入学して1カ月経ったけど、学校には少し慣れてきた？  
 生徒：・・・はあ、まあ。  
 先生：どうして慣れないんだろうね。  
 生徒：なんとなく・・・。  
 先生：最初は、自分からも積極的にどんどん動いてみればいいんだよ。  
 生徒：はあ～、でもなあ・・・。  
 先生：大丈夫。少しだけ頑張ればいいんだ。な？  
 生徒：はい・・・。

※後日、学級委員をしている生徒に、積極的に声をかけてあげてほしいと頼む。

#### (解説&アドバイス) 先入観や既成概念を取り払い、一人ひとりと向き合う

「この生徒は、なぜ馴染めていないのか」「遅刻が増え始めているのは、どういう理由があるのか」など、まずはこの生徒ならではの理由や状況を十分に検討することが大切です。ところが、とかく「時期的になかなか馴染めない生徒はいる」という先入観から、話をスタートさせてしまいがち。このケースもそのような思い込みによって、生徒の悩みをしっかりと聞かないまま、話を一般化して

しまいました。しかも、クラスの他の生徒に、関わってあげるように頼んでしまった。これをすると、頼まれた生徒に大きな負担がかかり、後々、学級委員のなり手がなくなるなど、クラス運営全体への悪影響が懸念されます。まずは、先生自身がしっかり目の前の生徒一人ひとりの事情を聴き、向き合うことを大事にしてください。

### さらに深刻化しそうなケースでの ありがち対応

※1週間休みが続き、家庭訪問をすることに

先生：1週間休みが続いて心配になって来てみたんだ。この1週間、どうしていたんだ？  
 生徒：・・・家にいました。  
 先生：家で何をしてたんだ？  
 生徒：本を読んだり、ゲームをしたり、・・・。  
 先生：学校を休んだことをどんなふうに思ってる？  
 生徒：ん～・・・。  
 先生：思っていることを話してみてよ。  
 生徒：ん～・・・。  
 (少し時間が経って)  
 先生：まだ学校始まったばかりだしさ。勇気出して出て来いよ。みんな待っているぞ。  
 生徒：・・・。

#### (解説&アドバイス) 熱意だけではなく、生徒が抱える課題への知識・勉強も必要

単に遅刻が増えるだけでなく休みも続くなど、事態が深刻化しそうな生徒に対して、まずは家庭訪問をする。そういう熱意はとても大切です。しかし、残念ながら、「引きこもり」に対する理解や知識が不足していて、かえって生徒を追い込むケースも少なくありません。引きこもっている生徒に、「休んでいることをどう思っているか」などと聞いても、回答はほとんど返ってきません。嫌な

感情を想起するので行き詰まり状態になるからです。また、そういうタイプの生徒は、他者と積極的に関わるスキルを身に付けていないことが多いので、「みんなが待っているよ」という声かけは、かえってプレッシャーになることがあります。だから熱意だけの指導では不十分で、生徒理解と対応に関する研修が必要なのです。

### 学校に馴染めない生徒への対応のポイント

1. 共感する姿勢
2. しっかり話を聴く
3. 信頼関係を築く
4. 安易な「頑張れ」は控える

⇒ 例えば、こんなやりとり例で・・・

先生：最近、少し遅刻が続いていたようで、先生心配していたんだ。  
 生徒：すみません。バスがよく遅れて・・・。  
 先生：ああ、〇〇を通る道は、朝はよく渋滞しているみたいだな。  
 生徒：はい・・・。少し早めに出ようとは思っているんですけど。  
 先生：うん。もう1本だけでも早いバスに乗れるといいな。  
 生徒：はい。気を付けます。  
 先生：ところで、少し学校には慣れたか？ いつも一人でいることが多いようだったから、その点でも実は先生、少し気になっていたんだ。  
 生徒：ん～、まあ、もともとあまり人と話すのは得意じゃないし・・・。  
 先生：得意じゃないけど、嫌いではない？  
 生徒：まあ、そりゃ、好きなことの話ができると楽しいけど。  
 先生：そっか、どんなことが好きなんだ？

詳しい解説は次ページで



## 従来型の「先生」としての立場や 考え方を変えていく必要があります

生徒に「共感」し、  
一緒に乗り越えていく

### 学習指導要領でも重視される「コミュニケーション」力

「子供一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりできるようにすることが重要である。そのため、子供たちが自己評価を行うことを、教科等の特質に応じて学習活動の一つとして位置付けることが適当である。(中略)その際、**教員が対話的に関わることで、自己評価に関する学習活動を深めていくことが重要である**」

(「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)より)

#### <主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善>

「選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、生徒にとって政治や社会が一層身近なものとなっており、高等学校においては、社会で求められる資質・能力を全ての生徒に育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことがこれまで以上に求められること。また、特に高等学校教育においては、大学入学者選抜に向けた対策が動機付けとなり、小・中学校に比べ知識伝達型の授業にとどまりがちであることや、卒業後の学習や社会生活に必要な力の育成につながっていないことが課題となっていることから、**主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要とされていること**」

(「高等学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について」(通知)より)

少し前まで、今どきの生徒はコミュニケーション能力が低い、これからはコミュニケーション能力を高める必要がある、と言われていました。そういう状況において、学校ではどのようにコミュニケーション能力を高める取り組みをしてきたでしょうか。必要性は理解しつつも、教育課程の中でどう位置付けるかが難しく、なかなか取り組むことができなかった学校も多いと思います。

しかし、次期学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が明確に示され、コンピューターが重視されています。コミュニケーション能力が必要ということがさらに進み、高い次元での「対話力」が教師にも生徒にも、求められています。

特にそれが発揮されるのが、生徒と直接向き合う進路指導や生徒指導の場面だといえます。そのような場面において、いかに生徒と対等に

関わりコミュニケーションをとっていくのか。そこから「対話」がスタートします。

学校の先生は、生徒との関わりに日常の多くの時間を費やしています。教師―生徒関係は、指導するものと指導を受ける者という強弱の関係性があります。しかし、これからの教育において生徒のコミュニケーション能力を身に付けさせるためには、この強弱関係だけでは不十分です。

以前は、先生と言われる人が、一方的にアドバイスしたり、説明したり、叱つたりするだけで十分にやっていける時代もありました。しかし、それだけでは敬意をもって接してもらえる時代ではなく、具体的に丁寧に説明し、理解、納得してもらうと合意形成することが必要になりました。先生と呼ばれる専門職の人たちこそ、専門的な知識だけではなく、それをわかりやすく説明し、一緒に課題を乗り越えていくというコミュニケーション能力が求められているのです。今回のケースは、教師役割は一端脇に置いて、生徒のことをわかってもらう姿勢でコミュニケーションすることが必要なケース。そこに気づくかどうかが大変なポイントです。

### 自分の感情をコントロールする 関わり方が大事

生徒との対等なコミュニケーションを成立させていくためには、まずは「共感する」ことが必要不可欠です。話の中で、一方的に決めつけたり、誘導するのではなく、目の前の生徒が何に困っているのか。その事情や背景を十分に理解し共感することです。そのためには、教師が自分の感情に気づき、コントロールできることも大切です。「なぜ遅刻するのか」「なぜ人と関わろうとしないのか」と腹を立てる場面もあるかもしれませんが、しかし、そこで腹を立て、自分の感情から発する言葉は、生徒の心を閉ざしてしまいます。

「腹を立てたときには6秒待つ」「怒りの対象から一端視線を外す」など、最近ではアンガーマネジメントを耳にすることが増えているかと思えます。コミュニケーションのスタートとして、このような知識も役立つことと思います。



教師のためのケース別  
アンガーマネジメント  
川上淳子著 小学館  
対生徒、対保護者など、  
さまざまなケース別に具  
体的なアンガーマネジ  
メントが解説されている。